

# 『平家物語』における死生観

持田 梓実

(山本 淳子ゼミ)

## 目次

はじめに
第一章 平家一門の最期
第二章 儒教・仏教の思想における死生観
第一節 平重盛 儒教的な思想
第二節 平維盛 仏教的な思想
第三章 平家らしい最期
第一節 敦盛最期
第二節 能登殿最期
おわりに

## はじめに

『平家物語』は哀傷の物語である。平清盛をはじめとする平家一門は栄華を極め、そして歴史上で瞬く間に滅びていく。その平安末期の激動の時代を、平家に焦点を当てて叙事詩的に描いた軍記物語である。この作品のテーマとなるものは、「諸行無常」や「盛者必衰」という仏教的思想にある。この世に存在するものは全て変化するという考えであるため、人が生きていく上で大きな変化をもたらすものは「死」となるだろう。仏教における認識では、生き物の魂は輪廻転生を繰り返すという思想であり、「死」を迎えることも輪廻転生の一部であると考えられている。したがって、『平家物語』に描かれる「死」に着目することにより、本稿では仏教的思想を基にしてこの作品の根幹となる、作中の人々の死生観について取り上げていきたい。

死生観とは、人における死ぬことと生きることに対する個人の価値観のことを指している。そしてその背景には、儒教・仏教・神道などの様々な思想が混在した平安時代末期の複雑な社会構造がある。そのような社会で人々は自身の最期を意識した際にどのようなことを考え、行動をするのかを明確に

することで、当時の社会の風潮や価値観を明らかにしたい。さらに、当時の死生観や宗教観を現代の一般的な価値観と比較することで、『平家物語』が描く当時の社会を捉えていくことにする。

本稿の構成として、まず、第一章では平家一門の最期をまとめた表を用いて、平家それぞれの最期がどのようなものであったかを分析する。そして、第二章では『平家物語』の主要人物である平重盛と平維盛を取り上げ、儒教や仏教の要素に着目しつつ、それぞれの思想について述べていく。続いて、第三章では平敦盛と平教経の最期について取り上げ、平家に特有の武士としての最期や死生観を考察していく。

しかし、注意すべきところとして、『平家物語』は諸本が数多く存在する作品としても知られている。作者を特定することはできず、時代の流れによって多くの人々の間で受け継がれてきた物語であるが故に曖昧さを有している。そのため、本稿では『新編 日本古典文学全集』を底本として進めていきたい。

## 第一章 平家一門の最期

平安時代末期の人々はどのような最期を遂げるだろうか。現代であればおおよそ避けることができるだろう飢餓や流行病、武力衝突による死というものが当時は身近なものであった。しかし、日本で一番に権力や財力を手にしている一族であれば、順当に考えると日本で最も幸福な人生と最期を遂げていても自然だと思える。混乱を極める戦乱の世で頭角を現した平家は、武士の身分でありながら殿上人の仲間入りを果たした。しかし、権威に胡座をかいて横暴に振る舞ったことで、「凡そ平家の悪行においては悉くきはまりぬ」（巻五「都遷」）と一族の外からは不満が募り、平家への敵対者は絶えなかった。その時代の栄華を誇った

平家一門はどのような人生の最期を迎えたのか、『平家物語』における主な登場人物に焦点を当て、それぞれ分類しつつ明示していく。(表1参照)

なお、表1の死因の項目をゴチック体にして区別したところがある。その分類方法としては、登場人物が最期を迎える際に自身の死に対して受容する「覚悟」があるかどうかという点である。登場人物それぞれの死生観を明らかにすることを本稿の狙いにおいているため、どのような状況で死を迎えたのかということに付随し、その時の心情についても取り上げることにする。

病没には、重盛、清盛、徳子が挙げられる。清盛は、当然だが栄華を極めた平家の中心人物である。そして、重盛と徳子はその子であり、重盛は長男として一門の筆頭となり、徳子は安徳天皇の実母である。以上のことから、三人は平家の中心であり、『平家物語』の作中でも主要人物として描かれている。重盛は巻三「医師問答」で、清盛は巻六「入道死去」にて、源平合戦が本格化する以前に逝去しており、反対に徳子は源平合戦のすべてを見届けてから床に就く。

斬首・斬殺は、壇ノ浦の戦いを終えて平家が政治の表舞台から失墜した後の出来事だった。重盛の死後に平家の家督を継いだ宗盛をはじめ、その子たちや宗盛の弟で平家の総大将として何度も戦に赴いた重衡、重盛の子たちである。斬首・斬殺は敵に捕らえられて処刑されるという、平家の誰もが望まない最期であった。

討死によって最期を迎えた人々は多くいた。平家の高官である公達や平家に忠誠心を持った家臣など多くの平家陣営が討死となった。戦場において死の形は様々であるが、本稿では敵の攻撃によって殺害された場合に限っている。人生の最期を戦場に身を置き、正々堂々と最期まで自分や味方を鼓舞して戦い続けた人や、戦場の混乱の中で敗れた者もいた。

戦場において自害した平家の人物は、平知盛の末子にあたる平知忠である。幼少であったために都を落ちる平家に同行しなかった知忠は壇ノ浦の戦いから十一年後の戦いによって深傷を負い、その場で自害した。

自ら生命を絶った一門の多くの最期は入水であった。源平の合戦の結末は、壇ノ浦の海に身を

投げた平家の武者たちによって終局を迎えたほどである。安徳天皇と清盛の妻である平時子に続いて、清盛の子や孫、兄弟といった平家の中心となってきた人々が次々と飛び込んでいき、多くの主要な登場人物の最期となった。

その一方で、戦場とは異なる場所に入水した人物もいる。重盛の子である平維盛や平清経である。清経は、西国へと落ちていく平家の同行中に、維盛は戦線を離れて出家した後に、静かに海へ沈んでいったのである。また、主人や夫を亡くした者たちが後を追うように、現世への希望を見出すことができず入水したのであった。

自ら生命を絶つ方法として、飢えることを選んだ者もいる。重盛の末子である宗実は、三歳のときに平家一門とは縁を切って藤原の性となり十八歳まで養家で暮らしていた。しかし、実父が重盛であることから平家一門の子孫を絶やされることを恐れ、養家を追い出されて出家し、自ら生命を絶ったのである。

以上に明示した死の形が、『平家物語』に描かれているその当時の最大の栄華を誇った一門それぞれの最期である。

さて、本稿の中核を担うところとして、登場人物の心情について分析して一考しなければならない。ゴチック体で示した基準は、自身が死を迎えることについて、潔く前向きに捉えて受容しているかという点にある。人が死を覚悟するときには、自分の中で何かしらの理由をつけ、それを享受する意識を持つという過程を経ることが肝心だと考える。そして、その死を享受している瞬間がそれぞれの登場人物にあれば、覚悟を持って死を迎える最期の場面といえるだろう。したがって、表1では登場人物の死に対する「覚悟」の意志の方向を確認できたところを注目するべき点としてゴチック体に変えて示した。

ここまで登場人物の最期を分類してきたが、平家一門の死には幾らかの傾向が窺える。それは、平家一門の最期は時系列に沿っておおよそ同じ形となっていることである。源平合戦により各地で戦況が進むと多くの平家は討死となり、都から西国へ落ちていく際には一門総出で移動する。そして、壇ノ浦の戦いになると一門の生き残りは揃って同じ海に入水するのである。さらに、入水する

## 『平家物語』における死生観

表1：『平家物語』登場人物の最期（平氏に属する者について、登場人物・所属欄に網かけを施した）

	登場話	登場人物	所属	場面	死因	備考
卷一						
卷二	西光被斬	西光		鹿ヶ谷の陰謀	斬殺	処刑
	大納言死去	藤原成親		鹿ヶ谷の陰謀	斬殺	処刑
卷三	頼豪	頼豪			自殺（絶食）	怨霊になる
	僧都死去	俊寛			自殺（絶食）	
	無文	平重盛	平氏		病没	熊野参詣後
卷四	宮御最期	源頼政	平氏→源氏	橋合戦	自害	
		以仁王	源氏	橋合戦	討死	
卷五						
卷六	新院崩御	高倉院			病没	
	入道死去	平清盛	平氏		病没	
	嗚声	城太郎助長	平氏	木曾義仲の追討	頓死	
卷七	篠原合戦	高橋長綱	平氏	篠原合戦	討死	
		武蔵有国	平氏	篠原合戦	討死	
	実盛	斎藤実盛	平氏	篠原合戦	討死	
卷八	大宰府落	平清経	平氏	都落ち後	入水	
	瀬尾最期	瀬尾太郎兼康	平氏	俱利伽羅峠の戦い後	討死	
卷九	木曾最期	木曾義仲	源氏（義仲）	川原合戦	討死	自害の予定
		今井四郎兼平	源氏（義仲）	川原合戦	自害	
	樋口被討罰	樋口次郎兼光	源氏（義仲）	川原合戦	斬首	処刑
	二度之懸	河原太郎高直	源氏	一ノ谷の戦い前	討死	
		河原次郎盛直	源氏	一ノ谷の戦い前	討死	
	越中前司最期	平盛俊	平氏	一ノ谷の戦い	討死	源氏の騙し討ち
	忠度最期	平忠度	平氏	一ノ谷の戦い	討死	
	敦盛最期	平敦盛	平氏	一ノ谷の戦い	討死	
	知章最期	平業盛	平氏	一ノ谷の戦い	討死	↓平家の若い公達が多く討たれる
		平経正	平氏	一ノ谷の戦い	討死	
		平経俊	平氏	一ノ谷の戦い	討死	
		平清房	平氏	一ノ谷の戦い	討死	
		平清貞	平氏	一ノ谷の戦い	討死	
		平知章	平氏	一ノ谷の戦い	討死	父・知盛を庇う
	落足	平師盛	平氏	一ノ谷の戦い	討死	
		平通盛	平氏	一ノ谷の戦い	討死	
	小宰相身投	小宰相	平氏	一ノ谷の戦い	入水	通盛の妻
卷十	維盛入水	平維盛	平氏	一ノ谷の戦い後	入水	
卷十一	嗣信最期	佐藤三郎兵衛嗣信	源氏	屋島の戦い	討死	
	先帝身投	平時子	平氏	壇ノ浦の戦い	入水	
		安德天皇	平氏	壇ノ浦の戦い	入水	
	能登殿最期	平教経	平氏	壇ノ浦の戦い	入水	↓平家の公達の多くが入水
		平教盛	平氏	壇ノ浦の戦い	入水	
		平経盛	平氏	壇ノ浦の戦い	入水	
		平資盛	平氏	壇ノ浦の戦い	入水	
		平有盛	平氏	壇ノ浦の戦い	入水	
		平行盛	平氏	壇ノ浦の戦い	入水	
		藤原景経	平氏	壇ノ浦の戦い	討死	
	内侍所都入	平知盛	平氏	壇ノ浦の戦い	入水	
	副将被斬	平能宗	平氏	壇ノ浦の戦い後	斬首	処刑
	大臣殿被斬	平宗盛	平氏	壇ノ浦の戦い後	斬首	処刑
		平清宗	平氏	壇ノ浦の戦い後	斬首	処刑
	重衡被斬	平重衡	平氏	壇ノ浦の戦い後	斬首	処刑
卷十二	土佐房被斬	土佐房昌俊	源氏（頼朝）		斬首	処刑
	泊瀬六代	源行家	源氏（義経）		斬首	処刑
		源義憲	源氏（義経）		自害	
	六代被斬	平忠房	平氏		斬殺	
		平宗実	平氏		自殺（絶食）	
		平知忠	平氏		自害	
		平盛嗣	平氏		斬首	処刑
		平六代	平氏		斬首	処刑
灌頂の巻	女院死去	平徳子（建礼門院）	平氏		病没	

際には兄弟や乳母子と共に手を組んだり、主従が死後も共にすることを誓い合ったりしている。これは、富士川の戦いで斎藤実盛が東国の武者を「親や子が討たれても意に介せず、その屍をも乗り越えて戦う」と表現した源氏軍と平家の鮮やかな対比となっている。

また、自害においても源氏軍と一線を画すことには、自刃という手段が著しく少ないことが挙げられる。平家一門の中では、表1に「自害」と記した知忠のみが自刃と予想できるが、実際に自刃となった人物は僅かである。そして、自害として最も多い手段が入水であった。武士として刀を有しているにも関わらず、戦場において死の手段を選ぶときには受動的な死を迎える方法を選択しているのである。

ここで考えられるのが、平安時代末期において浄土教の影響が大きく作用している可能性である。『平家物語』の作中では、阿弥陀仏への信仰が厚い平家の人々が度々念仏を唱える場面が見られる。それは、死を目前とした瞬間まで行っているように、意識の根幹となっているのである。阿弥陀仏の信仰について、立川武蔵氏は、「浄土教（阿弥陀信仰）では、死後に救いを求める傾向が強いといえましょう。（中略）浄土は、人々が生きている限り住むことのできない死者の国なのです。しかし、同時に生きている者たちのおそれる死を聖化する力をも放っている場でもあります<sup>1</sup>。」と述べている。このことから、平家の人々は死というものに対して積極的に迎えるものではなく、自然と訪れる受動的なものとして認識しているのではないだろうか。したがって、人生の最期に、源氏や一般的な武士としてのイメージにあるような潔い自害や切腹という形式的な自刃を選択する観念を平家は有していないと考えられる。そのため、都落ちの際にも、平家の結末から見ると、京都で敵兵を迎え討つ態勢を整える方が潔い一門の最期となっただろう。しかし、それよりも一門が揃って西国へ落ちてでも生きていくことを選択したところが、武士でありながら武士のイメージとは異なる平家の実像なのではないだろうか。

## 第二章 儒教・仏教の思想における死生観

### 第一節 平重盛 儒教的な思想

平重盛は平家の中でも特異な立場にあった。平安時代末期の最大権力者である父の清盛に、唯一物申せる人物なのである。『平家物語』においても周囲から厚い信頼が寄せられていたと記されており、平家の中心人物として存在感を見せていた。しかし、先述した通り、重盛は源平合戦が本格化する以前に逝去していることから、物語の序盤には惜しまれて舞台を退いている。そのような一門の筆頭であった重盛の最期はどのようなものであったのだろうか。本節では、重盛の死生観について儒教の要素に着目しつつ述べていく。平安時代末期、儒教は仏教ほどの影響力が日本にはなかったが、教養のある人物は学問として身につけていたと考えられる。儒教（儒学）の思想は、学問的な政治的支配層の教訓としての役割もあるからだ。このことから、儒教の思想が重盛の死生観に影響を与えていることがわかる場面を取り上げる。

先ほど既に述べた通り、重盛の最期が描かれている場面は巻三「医師問答」である。本節における以下の引用は、すべて『平家物語』巻三「医師問答」による。

やがて八月一日、臨終正念に住して、遂に失せ給ひぬ。御年四十三。世はさかりとみえつるに、哀れなりし事共なり。

（『平家物語』巻三「医師問答」、以下同）

重盛は病没にて、戦場ではなく穏やかに床で最期を遂げた平家では希少な人物である。しかし、重盛の心境は一般的な闘病生活とは異なる印象のものである。

本宮証誠殿の御前にて、夜もすがら敬白せられるは、『親父入道相国の体をみるに、悪逆無道にして、ややもすれば君をなやまし奉る。重盛長子として、頻りに諫をいたすといへども、身不肖の間、かれもって服膺せず。そのふるまひをみるに、一期の栄花猶あやふし。枝葉連続して、親を顕し、名を揚げん事かたし。比時に当つて、重盛いやしうも思へり。なまじひに列

## 『平家物語』における死生観

して、世に浮沈せん事、敢へて良臣孝子の法にあらず。しかじ名を逃れ身を退いて、今生の名望を抛て、来世の菩提を求めんには。但し凡夫薄地、是非にまどへるが故に、猶心ざしを恣にせず。南無権現金剛童子、願はくは子孫繁栄たえずして、仕へて朝廷にまじはるべくは、入道の悪心を和げて、天下の安全を得しめ給へ。栄耀又一期をかぎって、後昆恥に及ぶべくは、重盛が運命をつづめて、来世の苦輪を助け給へ。両ケの求願、ひとへに冥助を仰ぐ』と、肝胆を摧いて祈念せられけるに

重盛は、病に罹る直前に熊野へ参拝し、父である清盛の行き過ぎた非道によって悩まされる後白河法皇や、今後が危ぶまれる平家一門を危惧し、重盛自身の寿命を引き換えにして懸命に祈っていた。したがって、重盛の死は自身が願ったものということである。さらに、重盛は清盛によって遣わされた宋国の医師に対してこのようなことを述べている。

「今もって甘心す。重盛いやしくも九卿に列して、三台にのぼる。其運命をはかるに、もって天心にあり。なんぞ天心を察せずして、おろかに医療をいたはしうせむや。所勞もし定業たらば、医療をくはふとも益なからんか。又非業たらば、療治をくはへずとも、たすかる事をうべし。(中略)もしかの医術によって存命せば、本朝の医道なきに似たり。医術効驗なくんば、面謁所詮なし。就中本朝鼎臣の外相をもつて、異朝富有の来客にまみえん事、且は国の恥、且は道の陵遅なり。たとひ重盛、命は亡ずといふとも、いかでか国の恥を思ふ心を存せざらん。」

重盛は優れた医者から治療を受けることを丁寧に断っている。病にかかることは重盛自身の定められた業であるため、治療という手を加える必要がない。そして、もし現世に限った病であれば治療せずとも自然と助かると主張している。さらに、医師が宋国の人であることにも言及している。国の大臣となる立場である自身を宋国の医師に治してもらっているのは面目が立たないという旨である。

重盛のこの意思について、清盛は日本に相応しくないほど立派であると称していた。このように、国に対する責任感や忠義、父に対する敬意そのものが重盛の死生観を示唆しているといえる。

また、重盛の人物像として、『平家物語』では周囲の人々からこのように評価されている。

「人の親の子を思ふならひは、おろかなるが先立つだにもかなしきぞかし。いはんや是は、当家の棟梁、当世の賢人にておはしければ、恩愛の別、家の衰微、悲しんでも猶余あり。されば世には良臣をうしなへる事を歎き、家には武略のすたれぬる事をかなしむ。凡そは此おとど、文章うるはしうして、心に忠を存じ、才芸すぐれて、詞に徳を兼ね給へり。」

以上のように、重盛の持つ忠義や責任感が強く、才知に富んでいる姿を周囲の人々は高く評価していたようである。さらに、『平家物語』では、この章から重盛を偲ぶ内容の話を三つも続けているほどであるため、重盛の優れた人物像を強く印象付ける構成となっている。したがって、これらの印象的な重盛の性格の特徴を踏まえると、儒教的な観念を推察することができる。

加えて、重盛の最期は巻三「医師問答」にて迎えるが、それより以前に自身の生命を懸ける覚悟を既に示している描写がある。それは、巻二「烽火之沙汰」で忠義を尽くしている後白河法皇に対峙する清盛を説き伏せる場面である。重盛は、父に従って後白河法皇へ「不忠」とするか、後白河法皇を護って父に対して「不孝」となるか二つに一つであると清盛に諫言した。この「忠」と「孝」については、儒教における八種の徳を指している。重盛は「忠」と「孝」のどちらを優先するべきか決めきれないために、敢えて父に自身の生命を委ね、清盛を説得するに至った。このことから、重盛がこの二つの徳を重要視し、生命をかける覚悟を持つほどに強い信念があったことが窺える。また、八種の徳には、政治思想である徳治主義にもつながる。『論語』においても、「徳こそ政治の根本である。徳はたとえていえば北極星だ。すべての星は不動の北極星を中心に整然と運行する<sup>2</sup>。(為政篇)」と述べられている。重盛は、この徳治

主義の思想を根底とし、周囲の人々と関わったり政治を行ったりしていたのではないだろうか。卷三「医師問答」における国に対する責任感や後白河法皇に対する忠義、人物像の評価に対しても「徳」という儒教倫理の観念を強く持っていたといえるだろう。

## 第二節 平維盛 仏教的な思想

平安時代末期の日本は、仏教的な世界観が土台となって構成されている。特に、人々が死を迎える直前では、仏教的な思想や行動が度々散見される。入水する前に念仏を唱えてから海へ沈み、斬首される直前まで高僧の言葉に耳を傾ける。どのような最期の場面であっても仏教的な要素を切り離して考えることはできないのである。先ほど述べた重盛は、阿弥陀仏の前身である法蔵菩薩による四十八の誓願になぞらえて、自身の邸宅に四十八個の灯籠をかけて念仏を唱えたり、清盛は太政大臣となった翌年に出家したりしている。信仰心の厚さは様々だが、どのような人物であっても仏道を拝さなければならぬという風潮があったのである。本節では、平維盛の最期の場面である仏道の様子を踏まえつつ死生観を述べていく。

維盛は、重盛の長男で、養和元（1181）年に従三位となった<sup>3</sup>。正室は藤原成親の娘となる北の方であり、間には六代という長男と、娘が一人いた。重盛が『平家物語』によれば棟梁であったため、その長男である維盛は平家の筆頭となることを期待されていた。しかし、正室の北の方が藤原成親の娘であることや、父の重盛が早世であったために、一門内の立場は良いとは言えなかった。

人物像に焦点を当てると、維盛は武術よりも舞のような芸事に秀でていたとされる。卷十「熊野参詣」では、維盛の舞を「此三位中将、桜の花をかざして青海波を舞うて出でられたりしかば、露に媚びたる花の御姿、風に翻る舞の袖、地をてらし天もかかやくばかりなり。」と称している描写がある。さらに、容貌にも優れていたことから、最期を迎える際の見窄らしい様子は人々からすると鮮烈であっただろう。

また、妻子に慕われており、維盛が妻子を都に置いて西国へ落ちる際は、別れを惜しむ場面が情緒的に描かれている。卷七「維盛都落」では、北

の方と二人の子が懸命に維盛の出立を引き留める場面がある。

すでにうったたんとし給へば、袖にすがって、「都には父もなし、母もなし。捨てられ参らせ後、又誰にかはみゆべきに、いかならん人にも見えよなど承るこそうらめしけれ。前世の契ありければ、人こそ憐み給ふとも、又人ごとにしもや情をかくべき。いづくまでもともなひ奉り、同じ野原の露とも消え、一つ底の水屑ともならんとこそ契りしに、さればさ夜の寝覚のむつごとは皆偽になりにけり。せめては身一つならばいかがせん、捨てられ奉る身のうさを思ひ知つてもとどまりなん。をさなき者共をば、誰にみゆづり、いかにせよとかおほしめす。うらめしうもとどめ給ふ物かな」と、且つうはうらみ且つうはしたひ給へば、三位中将宣ひけるは、「誠に人は十三、われは十五より見そめ奉り、火のなか水の底へも共にいり、共に沈み、限ある別路までもおくれ先だたじとこそ申ししかども、かく心うき有様にいくさの陣へおもむけば、具足し奉り、ゆくゑも知らぬ旅の空にてうき目を見せ奉らんもうたてかるべし。其上今度は用意も候はず。いづくの浦にも心やすう落ちついたらば、それよりしてこそ迎に人をも奉らめ」とて、思ひきつてぞたたれける。中門の廊に出でて、鎧とって着、馬ひき寄せさせ、既に乗らんとし給へば、若公、姫君はしり出でて、父の鎧の袖、草摺に取りつき、「是はさればいづちへとて、わたらせ給ふぞ。我も参らん、われもゆかん」と面々にしたひ泣き給ふにぞ、うき世のきづなとおぼえて、三位中将いとどせんかたなげには見えられける。

（『平家物語』卷七「維盛都落」）

北の方は、都に身寄りがない中で二人の子を育てる不安や寂しさを訴え、子たちは泣きながら維盛の跡を着いて離れない様子が悲痛さを覚える場面である。

維盛の最期にあたる章は、卷十「維盛入水」である。しかし、他の主要な登場人物の中でもとりわけ丁寧に取り上げられているため、最期を迎えるまでの経緯から順に述べていくことにする。

## 『平家物語』における死生観

元暦元（1184）年に平家は屋島に滞在していたが、維盛は家臣を三人連れて人目を忍びつつ一門から離脱した。自身について、巻十「横笛」にて、「恋しき人々を今一度見もし見えばや」と妻子を忘れることができず、都へ向けて屋島を発ったのである。しかし、都では敵対する勢力に捕らえられて恥を晒してしまうことを考え、涙を呑んで以前は家臣であった僧侶のもとである現在の和歌山県にある高野山を訪ねた。

僧侶との問答の中で維盛はこのようなことを思い起こしている。

「さればこそ、人なみへに都を出でて、西国へ落ちくだりたりしかども、ふるさとにとどめおきしをさなき者共のこひしさ、いつ忘るべしとも覚えねば、その物思ふけしきのいはぬにしるくや見えけん、大臣殿も二位殿も、『此人は池の大納言のやうに二心あり』なるとて、思ひへだて給ひしかば、あるにかひなき我身かなと、いとど心もとどまらで、あくがれ出でて、是まではのがれたるなり。いかにもして山づたひに都へのほって、恋しき者共を今一度見もし見えばやとは思へども、本三位中将の事口惜しければ、それも叶はず。同じくは是にて出家して、火の中水の底へもいらばやと思ふなり。但し熊野へ参らんと思ふ宿願あり」

（『平家物語』巻十「高野巻」）

平家の一員として都を落ちていったが、どうしても幼い子が恋しく、思い沈んでいるところを周囲の平家の人々がよく思っていなかったことも心苦しかったと胸中を明かした。そして、思い切って出家をして熊野に参拝した後、自害したいという旨を述べた。

維盛は出家後にもやはり妻子を思う未練や執念を捨てることができなかった。巻十「熊野参詣」では、出家してもなお、都に残した妻子の穏やかな生活を祈願していた。

さらに、拳句には入水の際にも妻子を思い起こすほどである。

念仏し給ふ心のうちにも、「すでに只今をかぎ

りとは、都にはいかでか知るべきなれば、風のたよりのことつても、いまやへとこそまたんずらめ。遂にはかくれあるまじければ、此世になきものと聞いて、いかばかりかなげかんずらん」など思ひつづけ給へば、念仏をとどめ合掌を乱り、聖にむかって宣ひけるは、「あはれ人の身に、妻子といふ物をばもつまじかりけるものかな。此世にて物を思はするのみならず、後世菩提のさまたげとなりける口惜しさよ。只今も思ひ出づるぞや。か様の事を心中にのこせば、罪ふかからむなる間、懺悔するなり」とぞ宣ひける。

（『平家物語』巻十「維盛入水」）

そして、最後には「中将しかるべき善知識かなと思食し、忽ちに妄念をひるがへして、西に向ひ手を合せ、高声に念仏百返計となへつつ、『南無』と唱ふる声共に、海へぞ入り給ひける。」（巻十「維盛入水」）と入水にて自害するのである。

維盛の入水に至る経緯を辿ると、妻子への未練によって突き動かされていたことが分かる。

北の方は、「としごろ日比是程情なかりける人こそ兼ねても思はざりしか」とて、ふしまろびてぞ泣かれける。若公、姫君、女房達は、御簾の外までまろび出でて、人の聞くをもはばからず、声をはかりにぞをめさきさげび給ひける。此声々耳の底にとどまって、西海のたつ浪のうへ、吹く風の音までも聞く様にこそ思はれけぬ。

（『平家物語』巻七「維盛都落」）

都を落ちる際に泣いて引き留めていた妻子や女房の声が、西の海に立つ波の上を風が吹き通り、最期の青い海の水面を揺らす風の音と重なったのではないかと思うと『平家物語』の真髓を見るようである。

しかしながら、ここまで妻子への未練を強く持ちながら入水に踏み切った理由は何にあったのか。それは入水する直前の僧侶の言葉にあるように推察する。

「成仏得脱してさとりをひらき給ひなば、娑婆の故郷にたちかへって、妻子を道びき給はむ

事、還来穢国度人天、すこしも疑あるべからず」  
 (『平家物語』 卷十「維盛入水」)

成仏した者が悟りを開けば、故郷に再び帰ってきてこの世の人を救うことができるという意味である。維盛にとって最も肝心なことは、妻子に会うことや、妻子が穏やかに過ごすための救いとなることだ。したがって、僧侶による「還来穢国度人天」という言葉は、維盛の願望を叶える唯一の方法であったと考えられる。それにより、維盛は死を迎える覚悟が決まったのだろう。

また、維盛は武士でありながら文化的な側面を有していることから、戦に対して消極的な人柄であった。平家の文化的素養は多くの登場人物に挙げられるが、芸術としての文化が発展するときはいつの時代も平和でなくてはならない。維盛の、戦のための武術よりも芸術を磨き、妻子と共に穏やかに過ごしたいという想いは、現代にも通じているのではないだろうか。そのような維盛の苦悩や願望には、長い時間を経ても人々は強く共感し、『平家物語』の味わい深さを感じられるのである。

### 第三章 平家らしい最期

#### 第一節 敦盛最期

『平家物語』の中で、度々「平家の公達」と称されている人々がいる。公達と言えば一般的に貴族のことを指すが、この場においては「武士」であるとも言える。先述の通り、平家は武士の身分でありながら殿上人となっている。言わば、貴族であり武士でもあるその特異性が平家なのである。したがって、本節ではそのような貴族と武士のそれぞれの特徴が表れている「敦盛最期」を取り上げ、平敦盛の死生観について述べていく。

敦盛は、嘉応元(1169)年に清盛の弟である経盛の子として生まれる<sup>4</sup>。位は従五位下で任官まで至らなかったため、無官大夫と呼ばれる。そして、敦盛は笛の名手であったと称されており、巻九「敦盛最期」にも「件の笛はおほち忠盛笛の上手にて、鳥羽院より給はられたりけるとぞきこえし。経盛相伝せられたりしを、敦盛器量たるによって、もたれたりけるとかや。名をば小枝とぞ申しける。」と記載がある。祖父の忠盛が鳥羽院

から賜った小枝という笛を、敦盛が堪能だったために譲り受けたのである。そのような笛を身につけているということが、敦盛の大きな特徴を示していることになる。

敦盛の最期にあたる場面は、巻九「敦盛最期」である。一ノ谷の戦いの直後、敗走していた敦盛を見つけた源氏軍の武士である熊谷次郎直実の挑発から一息に物語が展開する。

熊谷、「あはれ大將軍とこそ見参らせ候へ。まさなうも敵にうしろを見せさせ給ふものかな。かへさせ給へ」と扇をあげてまねきければ、招かれてとってかへす。汀にうちあがらんとするところに、おしならべてむずとくんでどうどおち、とっておさへて頸をかかんと甲をおしあふのけてみければ、年十六七ばかりなるが、薄化粧して、かね黒なり。我子の小次郎がよはひ程にて、容顔まことに美麗なりければ、いづくに刀を立つべしともおほえず。「抑いかなる人にてましまし候ぞ。名のらせ給へ。たすけ参らせん」と申せば、「汝はたそ」と問ひ給ふ。「物その者で候はねども、武蔵国住人、熊谷次郎直実」となり申す。「さては、なんちにあうてはなるまじいぞ。なんちがためにはよい敵ぞ。名のらずとも頸をとって人に問へ。見知らうずるぞ」とぞ宣ひける。熊谷、「あッばれ、大將軍や。此人一人うち奉ったりとも、まくべきいくさに勝つべきやうもなし。又うち奉らずとも、勝つべきいくさにまくる事もよもあらじ。小二郎がうす手負うたるをだに、直実は心苦しうこそ思ふに、此殿の父、うたれぬと聞いて、いか計かなげき給はんずらん。あはれたすけ奉らばや」と思ひて、うしろをきつと見ければ、土肥、梶原五十騎ばかりでつづいたり。熊谷涙をおさへて申しけるは、「たすけ参らせんとは存じ候へども、御方の軍兵雲霞のごとく候。よものがれさせ給はじ。人手にかけ参らせんより、同じくは直実が手にかけ参らせて、後の御孝養をこそ仕り候はめ」と申しければ、「ただとく―頸をとれ」とぞ宣ひける。熊谷あまりにいとほしくて、いづくに刀をたつべしともおほえず、目もくれ心もきえはてて、前後不覚におほえけれども、さてしもあるべき事ならねば、泣く―



## 『平家物語』における死生観

頸をぞかいてンげる。

(『平家物語』巻九「敦盛最期」)

熊谷の挑発に乗った敦盛は引き返して対峙したが、体格差や経験値に劣ってしまい、すぐに形成が不利になる。熊谷が敦盛を抑え込んで兜を上げると、薄化粧をした美しく若い青年だったことに驚いた。熊谷は十六、七歳になる自身の息子に姿を重ねてしまい、敦盛を見逃して助けたいと申し出た。しかし、敦盛は潔く首を斬るようにと頑なだった。さらに、後方には源氏軍が迫ってきており、どのようにしても助けることはできないと悟った熊谷はやむなく敦盛の首を斬ったのだった。

この場面において特筆すべきところは、敦盛の廉潔で堂々とした姿である。それが見られる箇所を順に指摘していく。まず、熊谷の挑発に敦盛が引き返してしまうところである。付近に味方の軍の姿はなく、一騎打ちとなれば若く経験の浅い敦盛は劣勢となり、即ち「死」に直結することが分かっていたはずである。しかし、熊谷の言葉の「卑怯にも敵に後ろを見せるな」という表現に反応を示してしまったことには、敦盛の重要な想いに触れるところであると考えられる。「卑怯」や「敵に後ろを見せる」ということは、武士としての誠実性に反しており、誇り高かった敦盛には聞き流すことはできない言葉であったのではないだろうか。次に、敦盛が抑え込まれた際、熊谷の見逃すという申し出を潔く断るところである。直前に名乗るよう促された敦盛は、自分の首を斬って人に尋ねてみれば誰の首か分かると言い放った。見逃すと言われてもなお、潔く死を受け入れる姿は「卑怯」でもなく、「敵に後ろを見せる」ように逃げることでもない、廉潔な威厳があった。続いて、熊谷がどのようにしても助けられない敦盛を憐れに思い、死後の供養を申し出たが、それを気にも止めなかったところである。さらに、敦盛は、「ただ、さっさと首を取れ」(巻九「敦盛最期」現代語訳)と煽り立てた。本来であれば生命を惜しむことは当然だが、「死」を目前にして堂々とした姿であった。

一方で、巻九「敦盛最期」では、敦盛の廉潔で堂々とした姿とは異なる側面も描いている。

鎧直垂をとって頸をつつまんとしけるに、錦の袋にいれたる笛をぞ腰にさされたる。「あないとほし、この暁城のうちにて管絃し給ひつるは、此人々にておはしけり。当時みかたに東国の勢何万騎かあるらめども、いくさの陣へ笛もつ人はよもあらじ。上臈は猶もやさしかりけり」とて

(『平家物語』巻九「敦盛最期」)

首を包もうとして敦盛の鎧直垂に手をかけると、腰にある錦の袋に笛を入れていることを知った。そして、熊谷は今日の明け方に管弦の音色が聞こえてきたのは、この敦盛のものだったのだと気づき、戦場にまでも笛を持つ人はやはり優雅であると感じたという場面である。

第二章の第二節にて、平家の公達の文化的素養について述べたが、敦盛も例外ではなく笛の名手であった。鳥羽院から賜り、相伝された笛を大切に持ち、都を落ちる際にも持参している。そして、戦があった日にも奏で、戦場でも身につけているのである。これは、戦という自身の「死」を暗示するような場所を共にするほどの、特別大切にしたいという想いが窺える。したがって、戦場にあった笛というものは、敦盛ないしは平家の貴族としての文化的な象徴であるといえるだろう。以上のことから、貴族としての誇りと武士としての矜持を持っていることが平家らしさなのではないだろうか。

また、これらの場面は熊谷次郎直実の視点から描かれている。熊谷のモノログが多く、自身の息子と同じ歳ほどの廉潔で優雅な青年に対して憐れに思う様子が胸に迫るようである。『平家物語』では、このような語り度々用いられる。この物語にある特有の悲哀が、書き手(もしくは話者)の視点や平家ではない人物から見える景色が伝ってくるようである。この場面では、熊谷の手によって敦盛は斬られ、首を包まれていることから、生命の最期の瞬間を熊谷は間近で見届けた状況である。その様子は、読み手(もしくは聞き手)の中に鮮明に映り、読む者の腕の中で生命が最期を遂げたように感じさせるほどである。

## 第二節 能登殿最期

平家と源氏の戦いは壇ノ浦で結末を迎える。敗戦を悟った平家一門は次々と海へ沈み、平家は滅

亡するに至った。しかし、本節では壇ノ浦の戦いを悲哀に浸りながら眺める前に、勢い盛んな合戦の場面を中心に取り上げたい。

敗戦となる平家の中でも、最期まで快活な印象の人物がいた。それは、平教経である。教経は、清盛の弟である教盛と藤原資憲の娘の間に次男として生まれた<sup>5</sup>。治承三（1179）年に能登守となり、能登殿と呼ばれる<sup>6</sup>。教経は武術に優れた武将であり、豪快な言動の描写が多い。これについて、舞や管弦に秀でているものの、武術の素養が浅い維盛や敦盛とは正反対の特性があるといえよう。教経は強弓であったとされ、その活躍ぶりは巻十一「継信最期」に描かれている。

王城一の強弓、精兵にておはせしかば、矢さきにまはる者、射とほされずといふ事なし。なかにも九郎大夫判官を射おとさむとねらはれけれども、（中略）一人当千の兵ども、われもわれもと馬の頭をたてならべて、大將軍の矢おもてにふさがりければ、力および給はず、「矢おもての雑人原、そこのき候へ」とて、さしつめひきつめさんへに射給へば、やにはに鎧武者十余騎ばかり射おとさる。

（『平家物語』巻十一「嗣信最期」）

このように、教経は屋島の戦いでも健闘しており、『平家物語』の躍動的な合戦場面において一役買っているのである。そして、その活躍は壇ノ浦の戦いにも記されている。

「凡そ能登守教経の矢さきにまはる者こそなかりけれ。矢だねのある程射つくして、今日を最後とや思はれけむ、赤地の錦の直垂に唐綾威の鎧着て、いかものづくりの大太刀ぬき、しら柄の大長刀の鞘をはづし、左右にもってなぎまはり給ふに、おもてをあはする者ぞなき。おほくの者どもうたれにけり。」

（『平家物語』巻十一「能登殿最期」）

この場面は、教経が大太刀と大長刀を左右に持って応戦しており、活躍ぶりが目覚ましい。このとき、教経自身は「今日が最後」と思っているようだが、諦めて戦を放棄するということをして

いない。このことが、教経の性質が強く現れているところであると考ええる。平家が劣勢となり、周囲の一門が入水していく生死のやり取りの中で、その後も戦い続けるのである。

さては大將軍にくめぐさんなれと心えて、打物くきみじかにとつて、源氏の舟に乗りうつり乗りうつり、をめきさけんでせめたたかふ。判官を見知り給はねば、物具のよき武者をば判官かとめをかけて、はせまはる。判官もさきに心えて、おもてにたつ様にはしけれども、とかくちがひて能登殿にはくまれず。されどもいかがしたりけむ、判官の舟に乗りあたって、あはやと目をかけてとんでかかるに、判官かなはじとや思はれけん、長刀脇にかいはさみ、みかたの舟の二丈ばかりのいたりけるに、ゆらりととび乗り給ひぬ。能登殿ははやわざやおとられたりけん、やがてつづいてもとび給はず。

（『平家物語』巻十一「能登殿最期」）

教経は、源氏軍の総大将である源義経を討つために舟を駆けまわり、遂に義経と同じ舟に対峙した。しかし、義経は素早く逃げていき、追いつくことはできないと判断した教経は追うことを止めたのだった。

これについて、先ほど述べた観点では、一見すると戦を放棄しているように思われる。しかし、私は義経を追うことが戦を諦めないことになるとは限らないと考えた。教経は義経の姿を見て、追うことが自身に適任だと思わず、他の責務を全うするために退いたのではないだろうか。混乱が生じる戦場で教経は、自暴自棄に戦うのではなく冷静に状況を俯瞰的に捉えていると考えられる。そして、この場面の直後に教経も最期を迎える。

いまはかうと思はれければ、太刀、長刀海へ投げいれ、甲もぬいですてられけり。鎧の草摺かなぐりすて、胴ばかり着て大童になり、大手をひろげてたたれたり。凡そあたりをはらってぞ見えたりける。おそろしななどもおろかなり。能登殿大音声をあげて、「われと思はん者どもは、寄って教経にくんでいけどりにせよ。鎌倉へくだって、頼朝にあうて、物一詞いはんと思

## 『平家物語』における死生観

ふぞ。寄れや寄れ」と宣へども、寄る者一人もなかりけり。

ここに土佐国の住人、安芸郷を知行しける安芸大領実康が子に、安芸太郎実光とて、卅人が力もったる大力の剛の者あり。われにちツともおとらぬ郎等一人、おととの次郎も普通にはすぐれたるしたたか者なり。安芸の太郎、能登殿を見奉って申しけるは、「いかに猛うましますとも、我等三人とりついたらんに、たとひたけ十丈の鬼なりとも、などかしたがへざるべき」とて、主従三人少舟に乗って、能登殿の舟におしならべ、「ゑい」といひて乗りうつり、甲の鍛をかたぶけ、太刀をぬいて一面にうってかかる。能登殿ちツともさわぎ給はず、まっさきにすすんだる安芸太郎が郎等を、裾をあはせて、海へどうどけいれ給ふ。つづいて寄る安芸太郎を、弓手の脇にとつてはさみ、弟の次郎をば馬手の脇にかいはさみ、一しめしめて、「いざうれ、さらばおのれら死途の山のともせよ」とて、生年廿六にて海へつとぞいり給ふ。

(『平家物語』 卷十一「能登殿最期」)

教経は最期、三人の剛者である敵兵を道連れに入水することになる。三人同時に打ちかかってきたところ、冷静に一人を足払いして海に落とし、二人は両脇に抱えて自身も飛び込んだ。教経はその瞬間に「さあ、貴様ら、それなら貴様らは死出の山の供をしろ」(卷十一「能登殿最期」現代語訳)と言い入水したことは、あまりにも潔い最期であった。このことは、教経の性質を踏まえると、その最期は自身の中で最善の責務の果たし方だったのではないかと推察する。

しかしながら、『平家物語』は勢い盛んな合戦と共に、やはり立ち返るところは「悲哀」である。「能登殿最期」にある最後の本文の言葉を古川日出男氏はこのように現代語訳をしている。

「そう言い、海へつと飛び込まれた。

この年、能登の守教経殿は生年二十六だった。」

(古川日出男訳『平家物語』 卷十一

「能登殿最期」)

『平家物語』では多くの若い公達の最期の場面

に生年を記している。教経も早逝の例外ではない。作中の勇猛果敢な活躍で潔い最期を遂げた天晴れな姿と、二十六歳で人生を終えたことに対する哀れみの、大きく乖離した印象を読者に与える構成となっている。

## おわりに

本稿では、『平家物語』に描かれる「死」に着目して、作中の人物の最期と死生観について考察してきた。その中でも特筆すべきは、平家の人々が最期を迎えるときの「覚悟」の有無である。これについて焦点を当てることで、平家の人々がそれぞれ持つ死生観について、より鮮明に考察できたと思われる。

第一章では、主な登場人物をはじめとする平家一門の最期を表にまとめて明示した。そこから明らかになったことは、平家は最期を迎える際に、二つの傾向があることである。一つ目は、平家一門は時系列に沿って最期の形がおおよそ同じようになっていることである。親子や兄弟など、一門の間で生死を供にするような選択をしている。二つ目は、自害をする際に自刃という手段をほとんど選ばないことである。それは、阿弥陀仏への信仰が厚く、自然死に近い受動的な形で迎える最期を望んでいるからだと推察できる。

そして、第二章では、平重盛と平維盛に焦点を当て、儒教と仏教の思想から死生観をそれぞれ考察した。重盛は、儒教倫理の「徳」という観点を重視しており、父の清盛や君主である後白河法皇に忠義を示していた。維盛は、妻子に対する想いと仏教観の差異に悩みを抱えていたが、「還来穢国度人天」という仏教思想から自身の最期に対する「覚悟」を決めることができたのではないかと考えた。また、維盛の妻子への想いや文化的素養の高さが故に抱えている苦悩や願望は、現代の人々も共感できる場所であった。

続いて、第三章では、平敦盛と平教経の死生観を踏まえて、平家の特有な性格を探究した。敦盛の廉潔さや風雅であることの信念や、教経の自身の責務に誠実な姿から、平家一門の性格的特徴の一端を捉えることができた。

『平家物語』を扱った研究にあたり、登場人物

の様々な人物像や死生観を考察してきた。それぞれの人々が抱える苦悩や経験は、現代に生きる私の想像を超えるほどの困難なものがあった。実際にこの物語に触れてみると、平家の滅亡を追体験しているような暗然とした感覚に陥るだろう。『平家物語』は哀傷の物語である。人は人生の最後に必ず死ぬということが作品の主題となっている。「死」が隣り合わせにある究極な状況だからこそ、登場人物の本来の想いが表れ、読者の本心に届いているのではないだろうか。また、そのような中でも描かれる人々が日々の小さな幸せや楽しみを辿りながら前へ進んでいく姿は、時代を問わず共感でき、心を動かされる作品となっていると考える。

最後に、本稿では限られた人物だけにしか、焦点を当てられなかったことが心残りである。平家を中心であることは当然だが、源氏の人々や名前が明かされていない人などのより多くの人物に目を向け、探究していくことを今後の課題としたい。

観 - 平知盛にみる死の過程と死生観 -」（目白大学短期大学部研究紀要編集委員会編『目白大学短期大学部研究紀要』49、目白大学短期大学部、2013年）

堀竹忠晃「平家物語の一試論 - 平重盛を中心に -」（『論究日本文学』24、立命館大学日本文学会、1965年）

<sup>1</sup> 立川武蔵『死と生の仏教哲学 親鸞と空海を読む』KADOKAWA、2023年

<sup>2</sup> 原文「子曰、為政以德、譬如北辰居其所、而衆星共之」。京都先端科学大学人文学部歴史文化学科の「哲学」の授業（樋口善郎先生）にて取り上げられた。

<sup>3</sup> 「平維盛」（ジャパナレッジ『国史大辞典』）

<sup>4</sup> 「平敦盛」（ジャパナレッジ『国史大辞典』）

<sup>5</sup> 「平教経」（ジャパナレッジ『国史大辞典』）

<sup>6</sup> 同上

## 【参考文献】

市古貞次『新編 日本古典文学全集 45・平家物語

(1)』小学館、1994年

市古貞次『新編 日本古典文学全集 46・平家物語

(2)』小学館、1994年

古川日出男訳『平家物語』（池澤夏樹＝個人編集  
日本文学全集 09）河出書房新社、2016年

沼波政保「「死」への想い - 『平家物語』の語るもの -」（『同明大学論叢』62、同朋学会、1990年）

村上詠子「史実に見る『平家物語』の人物の死生